

ミャンマーにおける最近の仏教儀礼

——地鎮祭とパターン祭——

池田正隆

〈事例その1〉

ヤンゴンにおけるダマヨン(説法堂)地鎮祭

はじめに

- I. ミンガラー・ゼディ・ダマヨン(説法堂)地鎮祭
 1. 施主ミンガラー市場商人たちの企画
 2. ダマヨンヂー(大説法堂)建設予定地
 3. 地鎮祭儀礼の執行
 - (1) カンマワーチャー Kammavāca(羯磨文)の誦唱
 - (2) ダマヨン敷地境内へポウポウ(laja;炒り米)を撒く
- II. 在家信者(施主たち)による寄進行為の儀礼
 4. 比丘・長老僧への食事供養
 5. 在家信者である施主たちの三掃依、五戒懇請
 6. 施主たちからの寄附金贈呈
 7. 比丘・長老僧からの法施
 - (1) 説経——パリッタ Paritta(護呪經)の誦唱
 - (2) 説法
 8. 回向——イエゼツチャー(滴水作法)

あとがき

はじめに

ヤンゴン市内のウー・ウエーブッラ長老僧院に滞在していた1998年3月20日のことであった。長老様が出かけると言うので、聞いてみると、地鎮祭に招かれているとのことであった。同行の大学院生O君と一緒にお願いして見学させていただくことにした。

ウー・ウエーブッラ長老僧院 (Bhaddanta Vepulla Aggamaha Pandita: Maha-sasanavepulla Monastery) は、シュエダゴン・パゴダの東門前側パハン・タウンシップ、ミョウマ地区に建立されており、近所に高等宗教裁判所 Thaing Saṅgha-nāyaka Apwe Yangon High Law Court (州選僧伽総監長老会ヤンゴン高等裁判所) があった。

裁判所の正門は、チャートーヤ通りに面しており、シュエダゴン・パゴダ東参道に数十メートルという近さであった。前には庭がありその横手はかなり広い空き地で、周囲は鉄棒の柵でこまれていた。(写真1, 2参照)

その空き地に説法堂を建立寄進しようとの企画が提案決定され、当日はミャンマー仏教徒のしきたりに従い「地鎮祭の儀礼がおこなわれることになっていて、施主はミンガラー・ゼージュヨ(市場)の商人たちだ」という。

宗教裁判所の2階には、在家

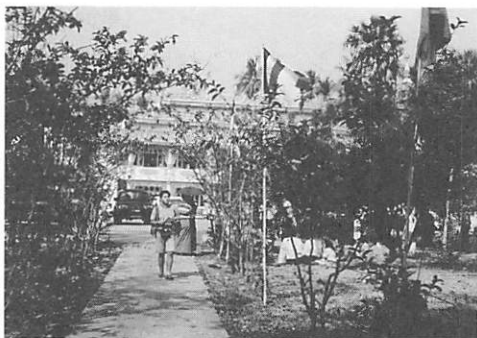


写真1. ダマヨン建設予定地、建物は州選僧伽総監長老会ヤンゴン高等裁判所



写真2. ダマヨン建設予定地、チャートーヤ通りに向かって。

信者の他にすでに6, 7名の比丘長老僧が参集していた。市場の商人, と言ってもビルマ服を着た都会風の立派な紳士や美しく着飾ったその家族の人達で, すでに2, 30名以上が階段を忙しそうに昇り降りしている。会場の飾りつけその他の準備に動き廻っている青年たち, 比丘僧への食事供養の調理で忙しい娘さんやおばさんたち, 大変な賑わいが始まっていた。

I. ミンガラーゼディ・ダマヨン (説法堂) 地鎮祭

1. 施主ミンガラー市場商人たちの企画

施主となってダマヨンの建築寄進を上申した商人たちの経営するミンガラー・ゼージョ (Mingalar Market) は, ヤンゴンでも有数の著名な市場で, 小売り商も入ってはいるが問屋が中心となり数百軒の商人が食料品から衣類, 家具, 建築資材, 化粧品, 薬品, 書籍, 文房具とあらゆる種類の商品を売買している。日本の百貨店と似た形態だが, 同業者が近辺に並んで店舗を出し商品を区画ぎりぎりまでうず高く積んで, それを仕切り代わりとして商売を競い合っている。

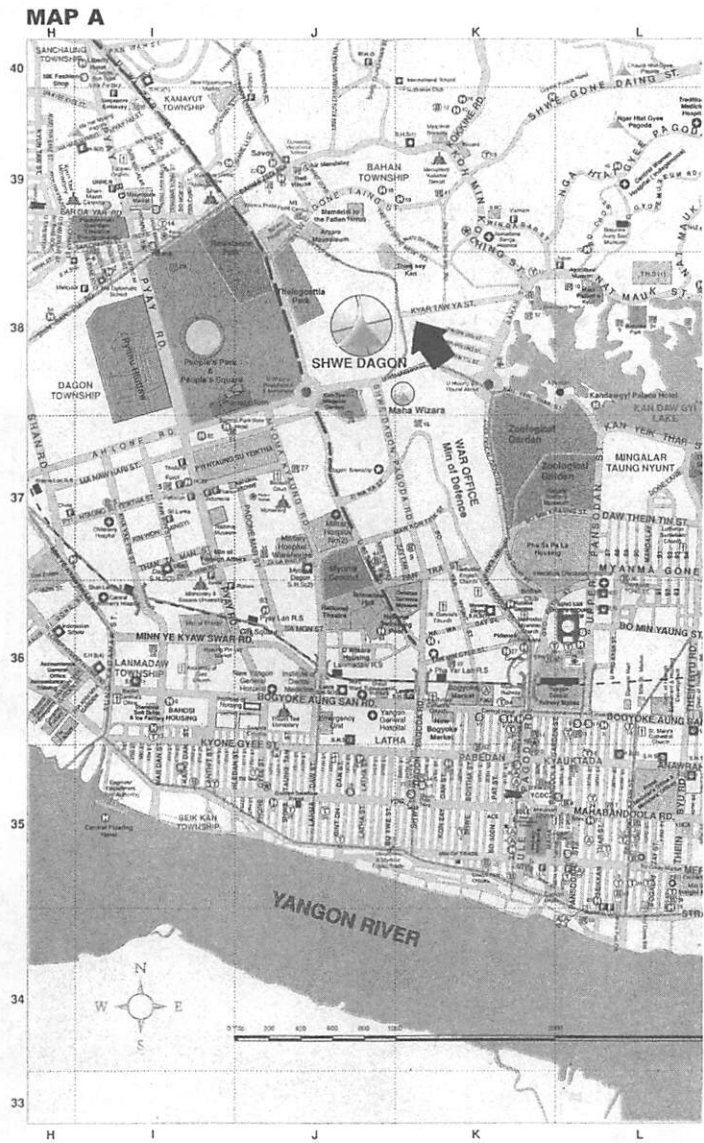
「ミンガラー」という市場名は, ミンガラー・タウンニョン町なる町名に由来する。この裁判所とそれほど近くはないが, シュエダゴン (Shwe Dagon) ・パゴダのほぼ東方カンドージー湖べりの道路を約3.6kmバズン

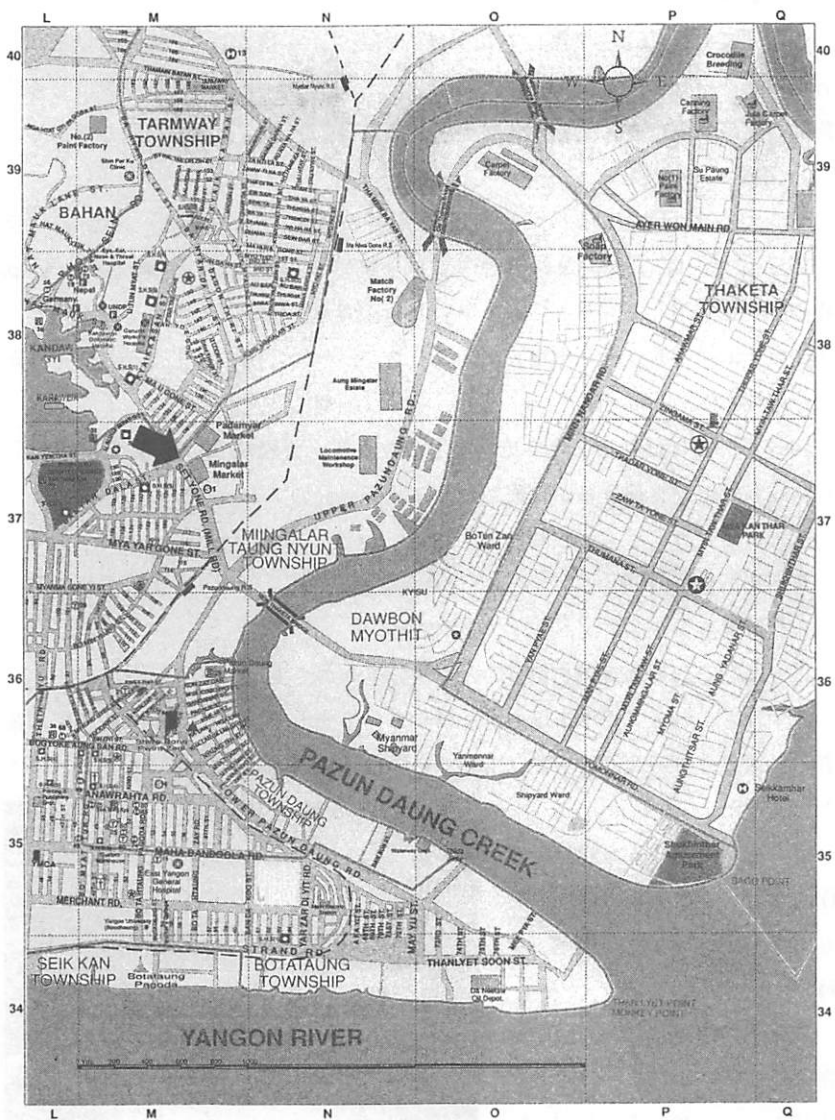


写真3. 施主たちの「ミンガラー市場」ビル〔5階建て〕



写真4. ミンガラー市場内部の布生地店舗, 最上部に仏壇(各店舗毎に)がある





ダウン・クリークへ向かって車を走らせばよいという距離である。[略地図 MAP A p. 4 および p. 5 の矢印参照]

5階建てビルの1・2階は衣類関係の商売で、1階だけで280店舗以上が、各種の布地や衣服類を積み上げて競い合い、3階は、宝石・貴金属をはじめ装飾品の店、4階は主に薬品・化粧品店、5階はレストランや事務所となっている。(写真3, 4参照)

ヤンゴン管区仏教サンガ裁判所事務局の書記であったウー・ヴィマラ(Vimala)師は、「ダマヨン(説法堂)を建てるなら、この土地[MAP A (p. 4) 矢印]を利用してもらってもよい」という考えを懐いていた。それを知ったミンガラー・ゼージョ(市場)の商人たちが、その意図に答えようと心を動かしたのである。

1997年10月には「ミンガラ市場ダマヨンジー(大説法堂)建造寄進事務局」が結成されて建築趣意書が作成され、建築委員会のメンバーが決められた。

- (1) ナーヤカアポエ(顧問委員) 19名、 (2) 実行委員 15名、
- (2) 建築委員 15名、 (4) 寄付集金委員 50名、 (5) 会計委員 3名、
- (6) 監査委員 3名、 (7) 広報委員 4名、

以上が、それぞれ責任を負うことを決定したのである。

いずれもこのミンガラ市場で店を構えている商人であるが、(1)の19名は年輩者で、あくまで顧問役であり、実動するのは(2)以下の委員たちである、とのことであった。

まもなく、説法堂の設計図が作成され、その実物の縮尺模型も出来上がってきた。(写真5参照)

最近まで使用していた古い建物を売り払い新しく五階建ての新ビルディングを建造して、顧客の出入りも順調であった彼ら



写真5. ミンガラ市場事務所横に陳列されていた新「大説法堂」建築模型

は意気軒昂であった。

とりあえず自分たちが持ちよって集めた寄付金20万チャットその他を地鎮祭の機会に寄進して功德を積もうとしていたのである。

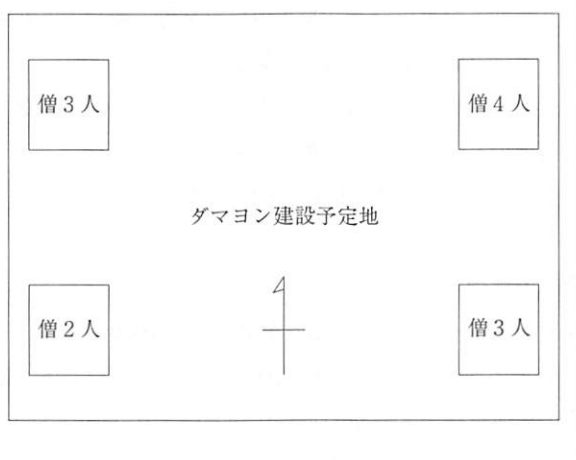
2. ダマヨンヂー（大説法堂）

建設予定地

ダマヨン建築予定の広場、そこは以前どのような建物が存在したのか不明だが、一方はシュエダゴン・パゴダへの東参道に面した箇所、宗教裁判所の建物の前側、そこへ向かって入っていく道路の左側に広がる空き地であった。今やすべて地上のものは取り払われて平坦にされており、縦60m、横35mほどの矩形の土地、所々に雑草もみられたが最も奥まった所からもパゴダ参詣の人々の行き交うのが柵越しにのぞみ見ることができ、ダマヨンつまり説法のための集会場建設には最適の場所のように思われた。(写真1, 2および6参照)



写真6. 新「大説法堂」建築予定地であることを示す看板 [1998年3月撮影]



シュエダゴンパゴダへの参道

比丘僧，長老僧が階下に降りて来られ，地鎮祭を挙行するその広場に姿を現した。面前に広がる空き地にはその土地を限定するかのようになり，一方の先端から他方の先端へ向けて細いひも（紐）が，張りめぐらされて関係者以外の私たちが足を踏み入れることができないようになっていた。4隅に近い箇所それぞれ

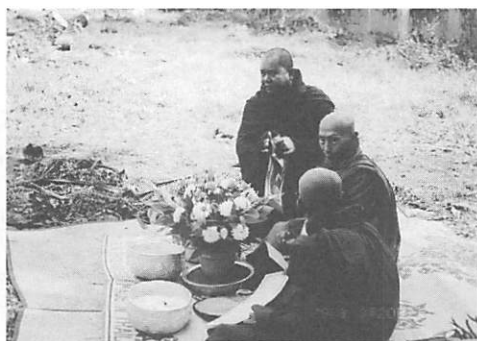


写真7. 地鎮祭のため各4方の1隅に敷きのべられたアンペラごごに座った長老がたと花，大きな銀製の容器には炒り米が入れられている。

ぞれ4か所へのみ，各内側へ2，3メートル入ったところに数枚のアンペラ（竹ごご）が敷き延べられて座処がしつらえられている。そこが比丘，長老僧が最初におこなう羯磨誦唱の儀礼執行場であった。（前頁下段の略図参照）

そこには祭壇はない。ただ多くの花が盛られた大きな花瓶が四隅に敷並べられたアンペラ上の台に1つずつ置かれているのみである。（写真7他参照）

施主ミンガラ市場の人達，男性は白い詰め襟ビルマ服を着込み，女性もそれぞれ思いっきり着飾った上にショール状の白布を肩に載せて，裁判所広間から階下へ降りてダマヨン建設予定の場所に集まってきた。

長老僧，比丘僧がたも敷地に入って3人程ずつのグループとなり，それぞれ一群となって角地近くのアンペラを敷いた場所へ進んで行く。

午前9時30分，いよいよ地鎮祭儀礼が始まるらしい。

3. 地鎮祭儀礼の執行

(1) カンマワーチャー Kammavāca（羯磨文）の誦唱

3名ほどずつ4グループとなった長老僧・比丘僧がたは，各々敷地の一方の隅近くで所定の場所を確認するかのようになり立ち止まり，あいさつをかわしながら敷物上の中央の花瓶を前にして座を占める。

比丘僧の1人がカンマ・ワーチャー Kammavāca（羯磨文）の包みを取り出

して1枚ずつ他の僧に手渡す。カンマワーチャはパーリ語の文章を間違えることのないよう誦唱者の眼前に持ち上げ、必ず見て読みあげるのである。

パリッタ(護呪経)読誦の場合は、暗記しているままに何も見ることなく唱えてよいのであるが、カンマワーチャー読誦の



写真8. 踞踞の姿勢で「羯磨文」を唱えている長老方と見守る施主の一群れ。

際には、それが許されていない。たとえ暗記して覚えているでも、みな必ず羯磨文を見ながら唱えるしきたりとなっている。

また羯磨文読誦の際は、座るのではなく、必ず全員が踞踞の姿勢で一斉に唱えなければならない。(写真8参照)

地鎮祭を行なう敷地の4隅の箇所それぞれの僧のグループが、カンマワーチャーを唱える。各グループ毎に、声を合わせてゆっくり読みあげられる。グループ毎であるから他のグループの誦唱については、特に気にしている様子ではなかった。

(a) Avippavāsa sīmā samuḥanana kammavāca (離れて住むことのできる旧結戒除去作法) — [ビルマ結集版 律藏 Vol. 3, 大品 p. 149, PTS 版 Vol. 1 p. 110]

“Suṇātu me bhante saṃgho, yo so saṃghena ticīvarena avippavāso sammato, yadisamghassa pattakalaṃ, saṃgho taṃ ticīvarena avippavāsaṃ samuḥaneyya, eṣā ñatti.”

“Suṇātu me bhante saṃgho, yo so saṃghena ticīvarena avippavāso sammato, saṃgho taṃ ticīvarena avippavāsaṃ samuḥanati. yassāyasmato khamati etassa ticīvarena avippavāsaṃ samuggato, so taṇhassa. yassa nakkhamati, sobhāseyya. samuhato so saṃghena

ticivarena avippavāso, khamati saṃghassa, tasmā tuṅhī
evametamdhārayami.”

〔尊者たちよ、サンガは私の話を聞いて下さい。サンガによって三衣と離れて住むことのできる、或るシーマーが認定されました。もしサンガに適当な時期ならば、サンガは三衣と離れて住むことのできるこのシーマーを除去するがよい。これが白（提案）である。〕

〔尊者たちよ、サンガは私の話を聞いて下さい。サンガによって三衣と離れて住むことのできる、或るシーマーが認定されました。サンガは三衣と離れて住むことのできるこのシーマーを除去します。もし三衣から離れて住むことのできるこのシーマーの除去が気に入るならば、（その方は）沈黙して下さい。気に入らない方は告げて下さい。サンガによって三衣と離れて住むことのできるシーマーは除去されました。サンガは気に入っています。皆は沈黙しているので賛成したと認めます。〕

(b) Samānasamvāsa sīmā sammūhanana kammavācā (共住することのできる旧結界除去作法) 一律蔵, 小品 [前に同じ]

“Suṇātu me bhante saṃgho, yā sā saṃghena sīmāsammata
samānasamvāsa ekuposatha. yadi saṃghassa pattakallaṃ, saṃgho taṃ
sīmāṃ samūhaneyya samānasamvāsaṃ ekuposathaṃ, esā ñatti.”

“Suṇātu me bhante saṃgho, yā sā saṃghena sīmāsammata
samānasamvāsa ekuposatha, saṃgho taṃ sīmāṃ samūhanati
samānasamvāsaṃ ekuposathaṃ. yassāyasmato khamati etissā sīmāya
samānasamvāsaṃ ekuposathāya samugghāto so taṇhassa. yassa nak-
khamati, so bhāseyya.

samūhata sā sīmā saṃghena samānasamvāsa ekuposatha, khamati
saṃghassa, tasmā tuṅhī, evametam dhārayami.”

〔尊者よ、サンガは私の話を聞いて下さい。サンガによって同じく住むことのできる一緒に布薩をすることのできる或るシーマーが認定されま

した。もしサンガに適当な時期であれば、サンガは同じく住むことのできる、一緒に布薩をすることのできるシーマーを除去するがよい。これが白（提案）である。」

「尊者よ、サンガは私の話を聞いて下さい。サンガによって同じく住むことのできる一緒に布薩をすることのできる或るシーマーが認定されました。サンガは同じく住むことのできる、一緒に布薩をすることのできるこのシーマーを除去します。もし同じく住むことのできる一緒に布薩をすることのできるこのシーマーの除去に賛成するならば、（その方は）黙して下さい。気に入らなければ告げて下さい。サンガによって一緒に住むことのできる、一緒に布薩をすることのできるシーマーは除去されました。サンガは気に入っています。皆は沈黙しているので賛成したと認めます。）」

以上が、旧結界除去作法である。なぜこうした旧結界の除去という作法をするのか、という点については、次のように説明してよいであろう。

それは「sIma（結界処）」なる場所は、境界をきめて世俗の人の足を踏み入れることが禁じられ、出家者のみが布薩など宗教儀礼をなすため定められた清浄なる戒場であった、という前提があるからである。今後は世俗の信者が仏法を聴聞するためなど自由に、気兼ねなくこの地に入出りできるよう配慮し、もし昔この箇所に古い結界処があったとすれば、それをあらかじめ取り除いておいてあげよう、ということなのである。ヤンゴンのシュエダゴン・パゴダ近隣の界限は、歴史も古い由緒ある土地であって、現在は分からなくとも、どの時代に如何なる建物が存在したか不明なのだから、そうした儀礼を必要とするのである。

したがって、この場合は僧伽羯磨ではない。つまり僧団内の決議事項を提案して取り決めるためサンガが挙行する「白四羯磨」などの儀礼とは異なる種類の儀礼なのである。そのためこの羯磨を唱える際には、かならずしもサンガ構成のため4人以上の比丘僧が必要というわけではなかったのである。

それでこの当日カンマを誦唱した比丘僧グループが2人の場合も、3人の場合もあって一向にさしつかえはなかったという次第であった。

もちろんのこと、結界処を新たに決めるような場合には、上記のように簡単ではない。諸々の必要条件を満たしていなければならないことになる。

(2) ダマヨン敷地境内へポウポウ (laja, 炒り米) を撒く

カンマワーチャ誦唱が終わって、儀式に参加していた人々が三々五々そこを去って裁判所の広間に帰っていった後のことであつた。



写真9. 羯磨文誦唱後に施主が建築予定地に「ポウポウ laja」をふりまく。

1人のビルマ服姿の施主が大きなボウル(容器)からポウポウ(laja)を片手に持って地面にふりまいている。日本で僧が読経しながら蓮の花びら状の紙をまいて仏の徳を讃える儀礼を思いださせる。しかしここではそうではなく世俗の信者が、ポウポウをまく。(写真9参照)

それは何かといえば、僧たちの前に供えられた銀器に盛られていた炒り米であつた。このような場合には、そうした品がいつも準備され、炒り米の他に、ときには炒り豆、炒りトウモロコシ(ポップコーン)などが用いられている。

それらは、比丘僧たちがカンマワーチャを唱えたことにより、仏徳の威力が加わり聖なる品となって浄化の働きをなすとみなされる。その聖なる品を境界内にふり散らして、邪悪なヤッカ(夜叉)やクンバンダ(鬘形夜叉)、ナーガ(龍)などを駆逐する。また、それらが境界内に入りこまないように、とふりまかれることになっているのである。

日本人が儀式で清めの塩を撒くの に似ているかも知れないが、それとも全く異なるわけで、仏教儀礼は風土が相違する場所でその地に似合った形態をとって生き続けていることが分かる。

Ⅱ. 在家信者（施主たち）による寄進行為の儀礼

4. 比丘・長老僧への食事供養

いつもの仏教行事のように、宗教裁判所所属の会館2階広間で出家の比丘・長老僧へ供養食が準備された。このときの出家僧の数は10数名にすぎず、まずはそれら僧たちに食事を供養していたが(写真10参照)、その後



写真10. 施主たちから地鎮祭執行の長老がたへ食事供養がなされる。

施主やその家族、手伝いの雇用者など集まった人々皆に食事がふるまわれた。したがって準備された齋飯は百数十人分以上という相当な分量であった。

僧への斉飯供養については、それが「福田なるサンガに、功德を積ませてもらったための行為」、つまり善行として南方仏教諸国の慣習なのである、などといわれる。確かにその通りであるが、ビルマ僧は具体的に次のように、人々に言う。

「生きものは、生きるために、食物を食べねばならない。もし食べなければ、長く生きることもなく、顔も美しくならず、体力もつかず、知識をひろめることもできない。しかし、食物を食べれば、長生きし（長寿）、顔も美しくなり（美貌）、心身も楽になる（安楽）。力も強くなり（体力）、知識も広く（理知）なる。食物を施す人は、他人に5つの効果を与えることになる。したがって、自分も同様の利益を得ることになる」（ウージョターランカーラ著『南方上座部仏教のおしえ』pp. 34-5 etc.）のであり、それはパーリ語三蔵（*Anguttara Nikaya* や *Khuddaka Nikaya*）中にも説かれていることである、と説き、自らもそれを固く信じて疑わないのである。

5. 在家信者である施主たちの三帰依、五戒懇請

食事が済み、その後のかたづけが終わると、もう正午を過ぎ、かなり時間が経過している。次は、その仏間でもあった同じ場所で僧たちが、一列にならんで仏壇を背後にして座る。このときは、写真11 (p. 16 参照) のように、腰かけとなるチーク材造りの椅子が並べられて、それに長老・比丘僧がたがそれぞれ座を占めた。

仏壇に向かって施主をはじめ在家信者たちが座る。両手を合わせ、合掌している人もいる。こうした儀礼、つまり三帰依五戒懇請については、すでにその作法などが紹介されているので、ここでは極く簡潔にふれる。

- (1) 敬白文の口唱——三帰依、五戒懇請の前に、施主である在家信者は、まず最初にビルマ語による敬白文を唱える。この敬白文には種々なるものがあるが、その一例を示すと、以下のような意味のものである。

(信者)「身、口、意の三業を清浄に、悟りの妙果を得るように、仏、法、僧の三宝を、身、口業と意業とをもって私は恭敬いたします。」

- (2) 教誡文の口唱——上記の敬白に対して僧は、以下のように教誡する。

(比丘僧)「三宝に恭敬して善思して、迷いを離れ、涅槃を得よう、またこの世界の四悪趣、三不善思、五魔、四怖畏、五損失をはなれて自由を得て、この終わりの生に涅槃を証すべし。」

なお、これにたいして信者は、

「承知しました、尊者さま。」と応える。

- (3) 三帰依・五戒授与の懇請——これはパーリ語で信者が唱えるのだが、師である比丘僧が先導して一区切りずつ口誦し、信者が次第取りして懇請するのである。

[比丘僧→在家信者]

「Ahaṃ bhante tisananena saha pañca sīlaṃ dhammaṃ yācāmi, anuggahaṃ katvā sīlaṃ detha me bhante. (尊者よ、私は三帰依と共に五戒の法を請います。尊者よ、どうか私に戒を授けて下さい。)」

[比丘僧]

「Yamaṃ vadāmi, taṃ vadetha. (私が唱えますから、それを復唱しなさい。)」

[在家信者]

「Āma bhante. (尊者よ、承知しました。)」

• ブツダへの敬礼文

「Namo tassa bhagavato arahato sammāsambuddhassa. (かの世尊・応供等覺者に帰依いたします。)」

[比丘僧が一度先誦して、信者が三誦する。]

続いて三帰依文が唱えられる。

• 三帰依文 (Tisarana)

「Buddhaṃ saraṇaṃ gacchāmi. (私は仏に帰依します。

Dhammaṃ saraṇaṃ gacchāmi. 私は法に帰依します。

Saṅghaṃ saraṇaṃ gacchāmi. 私は僧に帰依します。

Dutiyampi ~ 二度私は～

Tatīyampi ~ 三度私は～)]

[これは比丘僧が一度先誦し、信者が復唱する。]

• 五戒授与

次に優婆塞戒の授与がなされる。授戒師の唱導を次第取りにして復唱する。

①Paṇatipāta veramaṇī sikkhāpadaṃ samādiyāmi.

(私は不殺生戒を守ります。)

②Adinnādāna veramaṇī sikkhāpadaṃ samādiyāmi.

(私は不偷盜戒を守ります。)

③Kamesu micchācārā veramaṇī sikkhāpadaṃ samādiyāmi.

(私は不邪淫戒を守ります。)

④Musāvāda veramaṇī sikkhāpadaṃ samādiyāmi.

(私は不妄語戒を守ります。)

⑤Surāmeraya majjapamādaṭṭhānā veramaṇī sikkhāpadaṃ samādiyā-

mi. (私は不飲酒戒を守ります。)

[比丘僧]

「Tisaraṇena saḥā pañca sīlam dhammaṃ sadhukaṃ katvā appama-
dena sampadetha. (三帰依と共に五戒の法をよく守って、放逸に流
れず精進なさい。)」

[信者]

「Āma bhante. (承知しました。)」

以上は、在家布薩の当日（ビルマ暦の8日、15日、23日、晦日）や沙弥式、
比丘式などの際、あるいは任意のサンガへの供養の際にも行われる在家信者が
常になす「優婆塞戒懇請儀礼」の定まった形式である。

それにしたがって、このミンガラゼーゴの施主たちも、食事供養の後、ま
ず三宝に帰依し五戒の懇請をなして授与されたのである。（なお、要望により
布薩日には、八戒あるいは九戒の授与をうけて、それらを厳守しつつ当日を過
ごす信者も多い。後記拙著など参照。）

6. 施主たちからの寄附金贈呈

続いてこの儀礼の進行役を兼ねた司会の男性信者が、寄進行為を宣言し、サ
ンガの比丘・長老がたの面前で
寄付金額を明確に表示した箱型
の品（日本の目録に相当、写真11
参照）を贈るための儀式がなされ
た。

施主であるミンガラー市場の
各階の代表4名、およびそれを
受取り建造を促進する建築委員
の代表者が前方に進み出る。こ
の時には20万チャットと記され



写真11. 長老僧がたの面前で大説法堂建設資金が目録 [箱に金額明記] の形でダマヨン建造寄進委員会会長 U. Koko 氏へ手渡される。

た箱が恭しく4人の手から施主の代表でありダマヨン建造寄進委員会々長ウー・ココー(U. Koko)氏に差し出され、受納された。

これはダマヨンを建造し、それをサンガに寄進するかのよう受け取られそうであるが、ビルマにあってはダマヨンもバゴダもサンガの所有物ではない。僧院以外の宗教建造物は、それぞれ所管の出家者ではない「在家信者の代表で構成される委員会」が管理することになっているのである。

ミンガラゼージョの施主たちは、「ダマヨン(法堂)を建造して仏教繁栄のために寄与したい」(地鎮祭の翌1999年3月、当市場事務局を訪問した際見せてもらった建造寄進趣意書による)というのが目的であった。したがって、比丘・長老僧の見守る中で「ダマヨン建築を誓約し、寄進行為を実行する」ことが功德を積む行為として称賛されるのであり、ひいてはそのダマヨン完成、さらにダマヨン完成後の運営についてまで、責任を背負うことになるのである。

なお、寄せられた金額についてであるが、この地鎮祭の1年後、1999年3月には800万チャットが集まっており、ダマヨン建築の最低予定額3000万チャット(日本円に換算すると凡そ1000万円)は、市場所有の貯金金額も約900万チャットあるし、何の問題もなく達成できるとのことであった。

7. 比丘・長老僧からの法施

(1) 読経——パリッタ Paritta (護呪経)の誦唱

住宅その他、建物の新築の際には、祝儀に唱えられることになっているマンガラ・スッタ Mangala-sutta (吉祥経)およびメッタ・スッタ Metta-sutta (慈経)が読誦される。また、ビルマの地鎮祭ではメッタ・スッタを唱えるのが普通のしきたりとなっているとのことで、この時のヤンゴンにおける地鎮祭でも、メッタ・スッタが読誦された。パーリ語で唱えられるままに、その拙訳も付して以下に紹介しておく。

METTA SUTTA

1. Yassānubhāvato yakkha,

- Neva dassenti bhṛsanam
Yamhi cevānuyuñjanto,
Rattindiva-matandito.
2. Sukham supati sutto ca,
Pāpaṃ kiñci na passati;
Evamādiguṇūpetam,
Parittam taṃ bhaṇāma he.
3. Karaṇīya-matthakusalena,
Yam ta santampadam abhisamecca,
Sakko ujū ca suhujū ca,
Suvaco cassa mudu anatimāṇī.
4. Santussako ca subhāro ca,
Appakicco ca sallahukavutti,
Santindriyo ca nipako ca,
Appagabbho kulesvananugiddho.
5. Na ca khudda-mācare kiñci,
Yena viññū pare upavadeyyum.
Sukhino vā khemino hontu,
Sabbasatta bhavantu sukhitatta.
6. Ye keci paṇabhutatti,
Tasā vā thāvarā vanayasesā,
Dīgha vā ye va mahantā,
Majjhimā rassakā aṇukathulā.
7. Diṭṭhā vā ye va adiṭṭhā,
Ye va dūre vasanti avidūre,
Bhūtā vā sambhavesī va,
Sabbasatta bhavantu sukhitatta.
8. Na paro param nikubbetha,
Nātimaññetha katthaci na kañci,
Byārosanā paṭighasañña,

Nāṇṇa-maññaṇṇassa dukkha-miccheyya.

9. Māta yathā niyaṃ putta-,
Māyusā ekaputta-manurakkhe,
Evam pi sabbabhūtesu,
Manasaṃ bhāvaye aparimāṇaṃ.
10. Mettañ ca sabbalokasmi,
Manasaṃ bhāvaye aparimāṇaṃ,
Uddhaṃ adho ca tiriyañ ca,
Asambadhaṃ averaṃ.
11. Tiṭṭhaṃ caraṃ nisinno va,
Sayano yāvataṣṣa vitamiddho,
Etaṃ satiṃ adhiṭṭhēyya,
Brahma-metaṃ vihāra-midha mahu.
12. Diṭṭhiñ ca anupaggamma,
Sīlavā dāssanena sampanno,
Kāmesu vineyya gedhaṃ,
Na hi jātuggabbhaseyya puna reti.

- (1. この護呪の威力によって
神々は恐ろしきものを見せず
昼夜おこたることなく
その護呪をたびたび唱える人は
2. 心地よく安らかに眠り
睡眠中いかなる悪夢を見ることなし
このような威徳のある
その護呪をわれらは唱えよう
3. この寂靜なる境を 完全に了解し
その善と利とに 巧みな者のなすべきことは
有能にして 正しく素直であり
思慮深く柔和であって 高慢であってはならない

4. 足ることを知り 扶養しやすく
雑務少なく 簡素な生活をなし
諸々の感官を静め 粗暴ならず
信者の家にて 貪求してはならない
5. 賢者より非難されるような いかなる
下劣なることをも 行なうなかれ
あらゆる生きものは 幸福であれ
安穩にして 安楽であれ
6. 生きとし生けるものは ことごとく
怯えたるものも 動じざるものも
長きものも 大きなものも
中位のものも 短いものも 痩せたるも 太れるも
7. 見たことのあるものも 見たことのないものも
遠くに あるいは近くに住むものも
生まれたものも 生まれんとするものも
あらゆる生きものは 安楽であれ
8. 人は他の人を 欺くなかれ
どこでもだれでも 決して軽んじるなかれ
傷つけたり罵ったり 怒れる心にて
互いに他人の苦しみを 望むなかれ
9. あたかも母親が 自分の一人子を
生命をかけて 護るように
あらゆる生きものに 限りなき
慈しみの心を 持つよう修習せよ
10. 限りなき慈しみを 一切世間に
上に下に また横に
怨み心なく 敵意なく
障害もないように 修習せよ

11. 立っていても 歩いていても
座っていても 横になっても
眠らずにいる限り この慈念を確立する
これが梵住（最善の生き方）なりと説かれり
12. この慈念の修習者は 我見に執われず
戒をたもち 知見をそなえ
諸々の欲に対し 貪りを調伏し
決して再び 母胎に宿ることはないであろう)

以上のメッタ・スッタは、釈尊の在世時から説かれた著名な護呪として『三蔵』の中に納められ伝承されてきた。それは比丘サンガにあっても、たとえばミャンマーのシュエジン派にあっては朝夕の勤行時に読誦される常用經典の中に含まれており、毎週火曜日に読誦されている。スリランカやタイの上座仏教サンガにおいても誦唱されている經典である。ミャンマーでは「パイエイジー（大護呪）」11経の中における最も重要な三大護呪の1つとして、伝統的にその絶大な威力が認められてきたのである。

また、メッタ・スッタに説かれている「慈悲行の修習・実践」は、あらゆる比丘・長老僧を初め上座仏教の生命とでもいうべき実践徳目であり、日々念頭に置かれていることは現在も変わっていない。

(2) 説法

次に適任である比丘あるいは長老僧に説法をお願いし、声の調子もよいと評判をえた僧が、サンガを代表して説法をしてくれるのが常であり、この時も同様であった。

説教の内容は、まず仏・法・僧の徳を賛嘆し、知っているパーリ語偈文を引用しながら、説法堂建設の意義や仏法興隆のために尽力することによって積まれる功德の大きなこと、地鎮祭で唱えられたカンマワーチャ（羯磨文）の内容についての説明などが、懇切丁寧に述べられた。

それは30分から40分位の時間がかかっていたが、施主もその家族の信者たち

も、いちいちうなずきながら熱心に聞きほれているのだった。

8. 回向——イエゼツチャー (滴水作法)

いよいよこの儀式も最終のクライマックスをむかえることになる。こうして寄進行為により積まれた功德は、自分たちのみで享受するのではなく、すべての縁ある有情に回向する。それが、ビルマ仏教徒の常習であり伝統なのであった。

長老比丘の1人が代表して、ビルマ語、パーリ語混交の「アヌモーダナ (anumodana 随喜・祝福の言葉の意)」なる文句(説教)の誦唱を先導してくれる。

その中には儀式の主催者である施主たちの名前が織り込まれ、当日の供養や彼らの祈願の意義、布施と持戒と経文誦唱の功德を称賛し、また積んだ功德をあらゆる有情に回向して分け与えられることを宣言したものである。

衆会の在家施主一同は、その説法を味わいつつ長老比丘の言



写真12. 長老代表者の先唱してくれる「アヌモーダナ(祝福)の言葉」を皆で復唱しながら「イエゼツチャー(滴水供養)」が行われる。[同上]



写真13. 施主や信者たちから地鎮祭執行の長老がたへお礼の布施供養がなされる。

葉の後に続いて1節ずつ復唱していくのである。施主たちは、それを復唱して唱えながら銀製のお盆型の容器に水を少量ずつ垂らしていく「イエゼツチャ（滴水供養）」の作法を、同時におこなう。(写真12参照)

イエゼツチャの誦唱が終わる。すると在家信者一同全員が「サードゥ、サードゥ (sadhū, sadhu. 善哉, 善哉)」と一斉に大声で唱和して儀礼すべてが完了するである。

なお、かつては上述のように、「アヌモーダナ」の文句は、ビルマ語とパリー語とを一句切りずつ交互に使ってニッサヤ nissaya 形式にならない僧の学識や風格を感じさせるものであったようだが、最近パリー語の使用がめっきり減ってしまってビルマ語のみでおこなわれることが多い。

また、最後に信者たちから招かれて参加したそれぞれの比丘・長老1人ずつ全員にお布施が捧げられるのが普通となっている。(写真13参照)

以上で一連の行事は、終了したのであるが、イエゼツチャ（滴水作法）の水は、この儀礼終了後に、施主である信者によって戸外に持ち出され、近隣の草木などに、そっとかけてやる。それは供養したことによって積まれた功德を、亡き三界輪廻の縁者にまで配り分け与える回向の行為とされているからである。

追記（2000年2月 研究中間発表時）

この研究レポートは、最初に記したように1998年3月ヤンゴン滞在中に筆者が遭遇して見聞し、その後フィールド・ワークを続けているものである。したがって、まだ未完である。それから1年を経て翌1999年3月再度ヤンゴンへの旅をすることが出来て、それまで足を運んでいなかったミンガラー・ゼージョ（市場）を訪れ、ダマヨンジーの施主でもある事務所の役員の方々にも再会した。

彼らは筆者の問いかけに喜んで応答して下さったのみならず、説法堂建設に関する書類を見せてくれたり、資料となる書類のコピーを提供してくれた。

ビルマの首都ヤンゴンは、これまでも報じられているように急速に変貌しつつある。ビルマ仏教も、よく観察を続けていると、静かながら確かに動いてい

ることが分かる。近代化や都市化の波動は、人間も文化も、はたまた保守の権化とされてきた上座の仏教にも及んできている。

たとえば、新開地への伝導師の派遣、パターン儀礼の振興などに気付かされる。ミャンマーの上座仏教は、社会の急激な変化の中で、戒・定・慧の三学



写真14. 完成間近い「ミンガラーゼディ大説法堂」
(1999年12月撮影)

(仏教を仏教たらしめているところのもの)を失わずに、新しい仏道への道筋をどのように辿ろうとしているのだろうか。

同じ去年1999年暮れ、数日ではあったが、ヤンゴンをもた再度訪れる機会を得た。時間的な制約もあり、滞在中に残念ながらミンガラー市場までは行けなかった。ただ、その後説法堂はどうなっているかが気になっており、ぜひ見ておきたいと切望していた。

12月29日、ヤンゴンを離れる前日、ウー・ウエップラ長老にご挨拶にうかがう時間をつくることができた。その途中で、まわり道ではあったが、シュエダゴン・パゴダ・アシェモのチャートーヤ通りへ足を運んだ。

ダマヨンヂー(大説法堂)は立派に建ちあがっていた。まだ外観の塗装や内部の部屋の仕切り、建具などはこれから造作される場所であったが、それはシュエダゴン・パゴダ参道に面して堂々たる威容を見せていたのだった。(写真14参照)

謝 辞

この稿をなすに当たって、その機会を与えて下さったウー・ウエップラ長老、およびミンガラーゼージョの施主の方々、帰国後ご助言、ご教示をいただいたウー・ヴィッジャーナンダ長老、ヤンゴンの詳細な地図を利用させてくれたナンミャー・ケー・カインさん(立命館大学大学院博士課程留学生)、その

他ご協力をいただいた方々に謝意を表します。

参考文献

- ビルマ第六回結集版 律蔵第3巻 Mahavaggapaḷi 1979年刊本
ウー・ウェーブツラ著『南方仏教基本聖典』中山書房 1978
U. Vepulla, "KIHONSEITEN PĀḶI" 1978
Sayadaw U Silananda, "PARITTA PAḶI and Protective Suttas" Dhammananda
Vihara, California, USA, 1995
Sao Htun Hmat Win, "Eleven Holy Discourses of Protection: MAHĀ PARIT
TA PĀḶI" Department of Religious Affairs, 1991
Bhaddanta Vicittasarabhivamsa, "Mingun Tipiṭakadharamu 37 khan Kammavāca"
1953
佐々木教悟著『インド・東南アジア研究Ⅰ, 戒律と僧伽』1985
同 『インド・東南アジア研究Ⅱ, 上座部仏教』1986
平川 彰著『原始仏教の教団組織Ⅱ』春秋社 2000
生野善応著『ビルマ仏教—その実態と修業—』大蔵出版 1975
池田正隆著『ビルマ仏教—その歴史と儀礼・信仰』法蔵館 1995
池田正隆著「ビルマの読誦用仏教護呪經典2種」『鹿兒島大学史録』第5号(1972
年9月)所収

〈事例その2〉

シュエナンダー・パヤージー僧院のパターン祭

はじめに

I. パターン・ボエ(祭)について

1. その由来・歴史
2. 「アタンマセ」——ビルマ仏教徒の末法観
3. 「パターン」の威光
4. 供養本「パターン・パードー(発趣論パードー経文)」

II. パターン・ボエの実際

5. シュエダゴン・バゴダのパターン祭
6. シュエナンダー・パヤージー僧院のパターン祭
7. パターン誦唱祭の意義

あとがき

はじめに

1999年春のビルマ訪問時のことであった。たまたまヤンゴン在住の知人が私の仏教文化や儀礼に興味を懐いていることを知っていて「パターン・ボエがあるから、一緒に行こう」と誘って下さったのである。その土地で生活していたり、長期間滞在していないかぎり、こうした儀礼を見学できる機会は滅多になるので、私は嬉しくなって、他の用事はさておいて迎えの車に乗り込んだ。

3月7日の朝のことであった。行き先はヤンゴン市の郊外といってもよい新開地ミンガラドン・タウンシップのシュエナンダー・サンビャー村(略地図参照, MAP B (p. 28) 矢印)にあるシュエナンダー・パヤージー [ウー・インダカ長老] 僧院である。(トゥダマ Sudhamma 派, 現在の在住者: 比丘6名, 沙弥9名)

ヤンゴン市の街の中心地からは車で4, 50分はかかったと思う。このシュエナンダー・パヤージー僧院は、ミンガラドン工業団地を通り越した北側に位置する。私たちが到着した午前9時半頃、4日前から始まっていた【パター

ナ』の読誦はつづいており、拡声器から朗々と戸外に向けパリ語の経文を読みあげる音声が続いていた。

本堂の内陣中央で1人の比丘僧がマイクに向かい読みあげていく。その内陣に向かって左隅にも、交替して『パターンナ』を読誦することになっている比丘僧の一群が待機している。

（写真15参照）本堂に座って誦唱を聴いている在家信者もいた。

「第2回アタンマセ・マハーパターン・ユエパッ・プーゾーポエ（途絶えることのない大発趣論誦唱供養祭）」との文字が、本堂の内陣と下陣との間をしきるように設置された透明のガラス板に色あざやかに明記されていた。（写真16、17参照）

この1年前1998年に寺院建立一周年記念として同様のパターン祭が挙行されたので、今回は2回目だという。

『パターン』とは、ビルマ語で、パリ（Pali語）論蔵の「Paṭṭhana（発趣論）」を指す語でありパターンと発音する。



写真15. シュエナダー・バヤージーのパターン祭会場での誦唱中の比丘（向かって右端）と内陣にて誦唱の順番を待機している比丘がた。

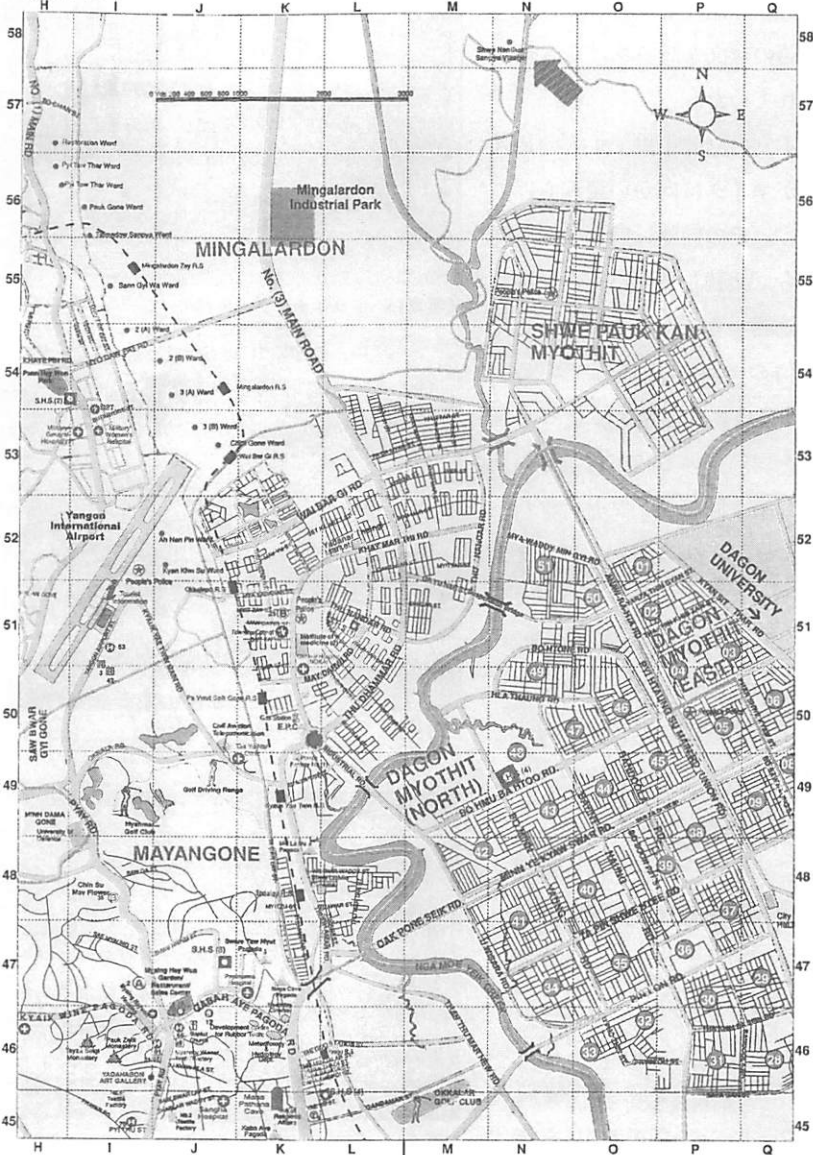


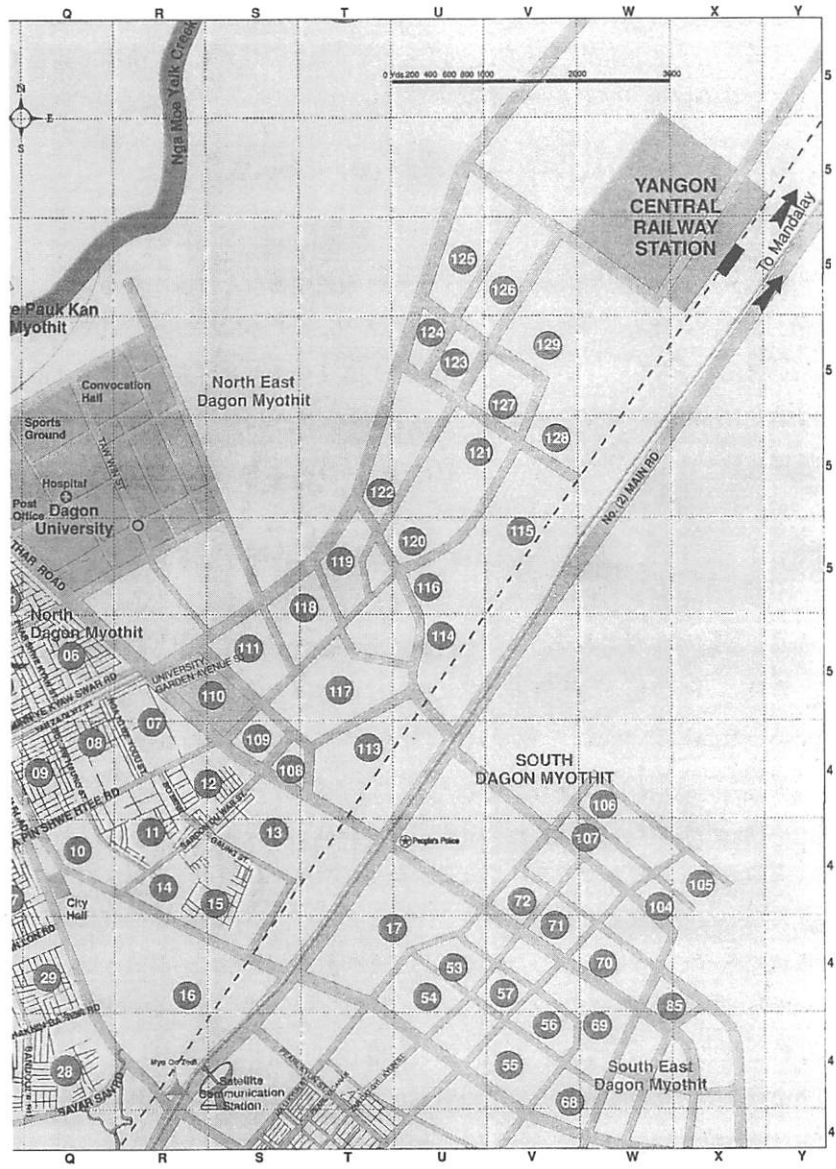
写真16. 本堂中央でマイクを前にパターン（発趣論）を誦唱する比丘僧。



写真17. 誦唱の声を断絶させないように引き継いで誦唱を始めた僧（左）と役割を済ませ交替し退場せんとしている僧（右）。

MAP B





そのアビダンマ最後の論書『パターンナ』の内容を「釈尊自身が説いた金科玉條なる経文として大切にしたい」という趣旨で、いつまでも仏教が繁栄し永続するよう、音声の途絶えさせることのないように、「パターン」全編を通して唱える祭典を催す、ということであった。

I. パターン・ボエ（祭）について

1. その由来・歴史

釈尊は、仏教が「永遠に滅びない」とか「永続する」とは説かなかった。それどころか、仏法もいずれは衰亡するであろう、それが500年後か、1000年後、あるいは2000年後かもしれない、と説いたとさえ伝承されてきた。日本では平安朝時代1052年に「末法」の時代に入るとされ、人々に動揺を与えたのだった。

上座仏教を奉じるミャンマーの仏教徒が「仏教が滅んでいくのではないか」と心配するのは、信仰心が篤いだけに、至極当然のことだ。そして、仏教が滅んでいくとすれば、「仏教の教えの中でも最も難しい部分から忘れ去られ、衰亡していく」と教えられてきた。経文が唱えられている限りは安心してよい。しかし、お経の声が街や村の僧院から聞こえてこなくなれば困るのである。お経の声は、いつであっても身近に鳴り響いてほしいというのが、彼らの願いであった。

「アビダンマ」の七論ある中で、パターンすなわち【Paṭṭhana（発趣論）】は、最後の第七番目に挙げられるものだが、非常に重要なものと教えられてきた。この教相を観察したときになって、初めて釈尊の身体から光明が放たれるようになったのだ、とも聞かされてきた。ところが、パターンの内容は、難解で煩瑣であって、多少学習した位では到底その教義、教相に通達できないことも分かっていたのだった。

仏教を滅亡させないために、先ず第一に難しいものとされる「パターン」の誦唱を行ない、仏教が衰亡しはじめ消失していくのを阻止しなければならない。彼らはそう考えた。

今から約324年前の「緬曆1038（西曆1676）年に、パターン堂（ザヤツ）を

建てて、ビルマ僧たちがパターン説法祭をして皆に聞かせた、との記録が残されている。それは『タータナリンガーヤ・サーダン（正法莊嚴文書）』[原典1956年刊本 p. 180]のみならず『サーサナワンサ（教史）』中にも記録されていて、「正法が雲間の月のようにかすんでいた」[生野訳 p. 248]時代、ミンレチョウデイン王の治世に、ガラネ・ナッセヨン長老は、従来の誦出方法で、まずミャンマー僧たちにパターン誦唱をさせ、次にモーン族僧たちにも唱えさせた。パターン誦唱会を全王国中で行ない、国民に聞かせた、と伝承されている。

仏法の永続・隆盛を願ってのこうした催しは、その後も行なわれてきたであろうが、その儀礼がいつどのようになされてきたのか、詳細はよく分かっていない。

「最近このパターン誦唱会、あるいは誦唱祭が盛んに举行されるようになってきている」という。それで思い出したのだが、実は1996年3月20日にペゲー（現在名バゴー）市のシュエモードー・パゴダ礼拝に立ち寄った際、境内の講堂から経文誦唱の声が鳴り響いてくる。思わず近寄り覗き見させていただいたことがあって、その時に唱えていたのが『パターン』であった。女性信者たち、Young Buddhist Associationの集会で、リーダーの女性が先導し、その声に従って一斉に大声で復唱していたのである。(写真18, 19参照)



写真18. シュエモードー・パゴダ境内の説法堂（バゴー、旧名ペゲー）でパターナの誦唱練習をするYMBA（仏教青年婦人会）の信者たち。



写真19. 同上

2. 「アタンマセ」——ビルマ仏教徒の末法観

「アタンマセ」とは、ビルマ語で「音声を途切らせないように」の意味である。すなわち経文誦唱の声は、途中で絶えて聞こえなくなってしまうはいけない。そうならないように連続して誦唱していかねばならない、ということである。

釈尊は、安居の期間中に天界に登られ切利天において、『パッターナ Patthana』を含むアビダンマ七論を、ご自身の御母君はじめ天人・天女の群衆に声を途中で切ることなく続けて説法をなさったという伝承があり、ビルマの仏教徒は、それを重要視する。(写真17参照)

それで、釈尊が声を途切らせず説いて下さったのだから、私たちもそのご恩を忘れず経文を途中で切ることのないように連続して唱えなければならないと信じているのである。

ビルマの仏教徒は、経典誦唱を特に喜ぶ。パーリ語の意味も知らない人が殆どなのに、そうなのである。日本人仏教徒が法事の際に、漢文のお経を唱えてもらって有難がるということがありますが、それ以上なのだ。いや、それどころの比ではない、というべきかもしれない。

街の雑踏の中で、昼間一日中、拡声器から僧侶の説法の声が流される。夜も一晩中、経典誦唱の大声が鳴り響いてくることはしばしばなのである。布薩日など、その声が喧しくて眠れない。私自身はそう思いながら、ついうとうとしていたのだが、ビルマ人たちは平気な顔をしている。彼らには子守歌のように聞こえるのかもしれない。

経文誦唱の音が聞こえてこない方が、彼らには不安なのかもしれない、真実私はそう考えたことさえあった。村を出はずれると、そこは密林だったり砂漠同然の何が襲ってくるかわからない外の世界、月の出ない夜の村の戸外は真暗闇の世界なのだから、お経の音が聞こえてくるところにいる自分は、護られてあるということになる、ミャンマーにいるということは、そういう風土の中に生命ある身として存在している、と考えなければいけないのかもしれない、そう思ったのである。

比丘僧が存在しなくなり、経典誦唱の音が聞こえなくなるということは、彼

ら仏教徒にとっては、淋しいどころではなくて、世界の一大事に違いない。耐えられないことに違いない。そこに思い至れば、「仏法が減んでいくとすれば、【パターン】から」と聞かされてきた彼らが、パターンの誦唱祭を続けなければならぬと考える必然性が理解できる。彼らの末法思想、仏法を滅亡させてはならない、という切羽詰まった懸命な気持ちが胸に伝わってくる。

3. 【パターン】の威光

ところで、【パターン】とは、どのような經典なのだろうか。その原典【Paṭṭhana（発趣論）】は、アビダンマ Abhidhamma（阿毘達磨、対法、論とも訳される語）七論書の中の一冊である。

七論の各々について説明する余裕がないのだが、ミャンマーの仏教では「アビダンマ Abhidhamma」が重要視される、と言われていることもあり、その論書の名称だけでもあげておこう。

- | | | |
|-----------------|----------------|--------|
| (1) ダンマサンガニー | Dhammasaṅgaṇī | (法集論) |
| (2) ヴィバンガ | Vibhaṅga | (分別論) |
| (3) ダートウカター | Dhātukatha | (界説論) |
| (4) プッガラパンニヤッティ | Puggalapaññati | (人施設論) |
| (5) カターヴァトゥ | Kathā-vatthu | (論事) |
| (6) ヤマカ | Yamaka | (双論) |
| (7) パッターナ | Paṭṭhana | (発趣論) |

上記のように、南方上座部仏教が伝持してきたパーリ語仏教聖典、三蔵の中の「論蔵」はこの七典籍しか存在しない。その最後にあげられる【パッターナ】は、実際にはともかくとして、「もっとも難解で煩瑣な論書」と人々に受け取られてきた。

もし仏教が衰亡していくとすれば、難解なために誦唱することが避けられ易い【パターン】からではないか。そう予測するのももっともである。したがって、パターン誦唱祭をして、その説かれた法（真理）の内容が、人々に意識され残り続けていくように、と要請される。

ところで、ビルマ仏教徒は、「釈尊の身体から光が発せられていた」ということを信じて疑わない。もちろん他国の仏教徒にもそう信じている人が多い。そのゴータマ・ブッダが身体から光明を発するようになったのは、この『パターンナ』の法を観察するに至ってからのことだ、と信じられている。

釈尊は菩提樹下で覚られ、その真理の法を味わわれたが、4週目に入って金剛座にてアビダンマの法を観察した。『ダンマサンガニー』から観察し始め、『ヴィバंगा』、『ダートゥカター』、『ブッガラパンニャッティ』、『カターヴァットゥ』、『ヤマカ』と進んだ。それらを観察しても光明を発することはなかった。しかし、『パターンナ』の「二十四縁(対象)」を観察したときに、6種の光明が身体の上に現れ出したのである。

ビルマの仏伝でも次のように記す。

「この六種の光明の顕れたのは、パットハーナという二十二小部に分かれている第七の阿毘達磨を知悉し給うた時であった。——中略——

鳶色の光明が、鬚髪や眉毛から流れ出た。金色の光明が、両眼と皮膚から顕れた。その肉と血からは紫の光明、歯と骨からは白蓮のような光明、手と足からは深紅の光明、その眉間からは断ち割った水晶に反映する光のような無垢無色の光明が流れ出た。これらの光明を受けたものは、すべて、太陽の光を反映する鏡のようにきらきらと輝いた。この六種の光明によって、大地は最浄の黄金の如く輝いた。」(赤沼智善訳『ビガンデー氏緬甸仏伝』p. 133, R.R.P. Bigandet, “The Life or Legend of GAUDAMA; The Buddha of the Burmese” p. 101 なお「パットハーナ」は『パターンナ』の意。)

こうした伝承を知ると、ようやく何故ビルマの人達が、あれほどまでに仏像が光明を発



写真20. タトーンのシュウエサン
ドー・バゴダ境内のブッ
ダ像

している姿に見えるようイルミネーションなどで飾りたてるのか、分かるような気がしてくるのである。(写真20etc. 参照)

アビダンマ(論書)の第一にあげた「ダンマサンガニー Dhammasaṅgaṇī (法集論)」の註釈書【アッタサーリニー Atthasalinī】では、ゴータマ仏がパターンナの「二十四縁」を自由自在に観察するに至って、一切智が遍満し「chabbaṇṇarasmiyo nikkhamiṃsu. (いろいろな6種の色の光明が発せられた)」(ビルマ第六結集版 p. 14, PTS 版 p. 13)と解説されている。こうした記述が彼らの「ブツダの身体からは光明が発せられた」というブツダへの称賛、驚異、崇拝、さらに信仰を生み出す根拠となっているようだ。

4. 供養本【パターン・パーリドー (発趣論パーリ経文)】

ビルマには、仏教書を専門に売る書店が沢山ある。大抵の有名バゴダの参道脇には、そうした売店が花屋、線香やローソクの売店などと共に軒を並べている。シュエダゴン・バゴダの南門参道では、参道脇の裏側にもう1路入った仏教書専門店が何軒も並んでいて、仏典購入のためには非常に好都合な場所となっているが、そのような書店に必ず薄い小さな手のひらの中におさまる位の20頁前後の本、冊子と呼んでよいものが置かれている。

それらの小冊子を何十冊も購入する人がいる。ときには何百冊も注文する人もいる。題名の異なる冊子を購入するのではない。同じ本を何冊も、まとめて購入する。どうするのか。供養会の際に配布するためである。それを参会者に布施して功德を積む。

そうした類の冊子が、ビルマ仏教徒の間でよく売れるのである。供養会は、色々な機会に、例えば知り合いの僧の誕生日など、しばしばおこなわれるからである。

【パイェヂー・パーリドー (大護呪経典集)】とか【憶持すべき護呪経とアピンハ経】、【ブツダへの礼拝・誓願偈文】、【御恩ある大長老方のおしえの真髓】などという題名のついた極小冊子が、そうした供養本である。この類の一種として【パターン・パーリドー (発趣論パーリ経文)】がある。「この頃はこ

れもよく売れる」と書店の女店主が言っていたが、もしその通りだとすると、やはり相当数の信者が『パターンナ』の「二十四縁」およびその解説のパーリ語句などを口ずさんでいる筈である。

「パターンナの第1巻は、よく知られているから」などと言う。しかし、第1巻と言い第1冊目と言っても、その最後までだけでも相当な長さであり、それは「煩瑣の極み」といわれているように、南方上座部の教義を知悉していなければ完全に理解することは難しいことも確かである。

Ⅱ. パターン・ボエの実際

5. シュエダゴン・パゴダのパターン祭

パターン誦唱会は、種々なる方法や規模でなされてきた、と考えられる。たとえば、ヤンゴンのシュエダゴン・パゴダではこのところ毎年「大パターン祭」が行われている。

その内容を紹介した冊子も出版されていて、それによれば、1972年から「アタンマセ・マハーパターン大供養会」が始められている。

それは毎年ダバウン月（ビルマ暦第12番目の月でほぼ3月に相当）の9日から15日満月の日まで1週間パゴダのゴーパカ（管理運営委員会）の決定により行われている。（写真21，22，23参照）

そして、「ブッダが初利天でアビダンマ七論を説くにあたって、声を途中で切ることなく説法なさったので、そのブッダのご恩にたいする感謝の念を示すため、やはり私たちが同様に音声の途切れることのないダンマ（仏法）の供養によってこのパターン供養祭を開催する」と宣言している。



写真21. シュエダゴン・パゴダ境内のパターン祭会場（写真正面の建物内）とその周辺に集っている信者たち。

ビルマの仏教徒は、三蔵は釈尊が説かれた聖典であり、論蔵（アビダンマ）も釈尊の直説である、と信じている。『パッターナ』の成立についての学説（それは教義の確立後で最後期に完成）などは念頭になく、ブッダが天界において説教なされたという伝承が大切にされる。

この伝承に関連した行事として、ビルマには「アビダンマ記念日祭」がある。これは雨期3か月の安居終了時に比丘サンガが必ず行なう「パワーラナ（要請式）」の際に、それと並行して在家信者たちが、ブッダが天界での説法を終了して地上にお帰りになることを記念して挙行する祭典であり、「パターン祭」とは別である。

シュエダゴン・パゴダのパターン祭は、釈尊の百八の特相にちなんで、四衆百八人ずつすなわち比丘僧108人、ティラシン（尼僧）108人、在家信者男性108人、女性108人が集合し誦唱される。『パッターナ』冒頭の序文に相当する「縁分別分 Paccayavibhaṅga-vāra」（24縁の名目列举）から始めて「諸縁説示 paccayuddesa」、続いて「細説 niddesa」の部分へと、全員が一斉に声をそろえて合誦する。また、この合誦の「パターン祭」期間中は、上記誦唱者たちに施物を供える信者たちで大いに賑わう。



写真22. シュエダゴン・パゴダのパターン祭で、これから誦唱に向かう比丘と随伴する信者。



写真23. シュエダゴン・パゴダ境内の建物中に設置されたパターン（誦唱）堂、内部で比丘僧の誦唱が続く。

6. シュエナンダー・パヤージー僧院のパターン・ボエ(祭)

(1) パッターナ Patthana (発趣論)の誦唱

パッターナ Patthana (発趣論)を5日間て全文通して1回誦唱する。つまりビルマの第六回仏典結集版で5冊あるパーリ語の「パッターナ」の経巻を計24名の比丘が、交替しつつ一名ずつ、中央のマイクを設けてある演台に登場して最初から最後まで、途中で休んだりして途切れることなく、誦みあげていくのである。私たちが訪ねたのは第5日目で、最後の日であった。(ちなみに和訳の「南伝大蔵経」では全7冊)したがって、今回は3月3日から7日までがシュエナンダー・サンビャー村における「パターン祭」であった。

誦唱者の比丘は30分毎に交替する。その理由は肉体的苦痛を避けるため、という。誦唱時間が長すぎると疲れのため誦唱スピードが落ちてくるので、そうならないように1人30分が適当だという説明であった。

誦唱する順番が自分にまわってくる比丘は、先に唱えている比丘が誦唱開始後30分になる数分前からすぐその横に待機して、かんぱつを入れず引継いで続けて誦唱していく。(写真17参照)途中で切ることなく続けるのであるから、夜間も誦唱は続けられていくわけである。その手際のよさは、「さすがに慣れたもの」という感じがして興味深かった。

こうしたパターン・ボエは、3日間の誦唱会、5日間、7日間、9日間のものと4種あるとのことであったが、最も多いのは5日間の儀礼だという。そして去年は天候が悪く3日間で終わった、とも付け加えてくれた。もう少し詳しく尋ねたかったのだが、諸般の事情で、それ以上は聞けなかった。もちろん各誦唱祭は、在家の信者の賛成・協力も得て、あらかじめ計画を立て、期間を決め挙行される。

5冊ある「パッターナ」の中で、第1冊目は、皆がよく知っているという理由から、第2冊目から最後までを誦出することもあるという。

午前10時30分頃「パターン」は、最後まで全編を通して無事に読誦し終わった。

(2) 斎飯供養

いつも行われる長老、比丘、沙弥など出家僧への食事の供養がなされる。(写真24参照) 村人やヤンゴン市内から集まってきた在家信者たちが、そこで調理したスープその他のおかず、自分たちが予め各自の家庭で煮炊きをして持参してきたものを盛りつけて、テーブルに並べる。比丘たちが座りおわると、すかさず施主の信者が一度軽くテーブルを持ち上げる。これは出家者へ斎飯を供えたあとの差し上げる(布施をする)ことを示す簡単な作法である。その食事にあずかることになった比丘たちは、持ち上げられた瞬間に自分の手を軽くテーブルにふれる。それで、はじめて出家者は、「非不与取(与えられざるものを取らない)」の戒を破ることなく食事をいただくことになるのである。(写真25参照) 僧たちの食事について在家の参会者が食事をする。



写真24. シュエナンダー・パヤージーのパターン祭で誦唱を完了した比丘や長老僧への食事供養。



写真25. 食事供養の際の作法「カッ」：食べものすべてが食卓に並べられたところで、施主たちが軽く少しテーブルを持ち上げ、供養された僧もその瞬間に軽くテーブルに手を触れる。

(3) 当日午後の儀礼行事

① 僧院住職 [主催者] あいさつ

「パターン祭」を無事終了できたことの喜びの表明。

パターン祭挙行に関する施主など在家信者の寄進や協力に対する感謝の表明とそれらの人々への祝福。

② 在家信者代表あいさつ

誦唱比丘僧がたへの感謝
の表明

- ③ 三帰依五戒懇請，授与
- ④ 法施
- ⑤ 回向
- ⑥ 僧への布施 (写真26参
照)

以上③④⑤⑥については，事
例その1の場合とほぼ同様に行
なわれていた。



写真26. 信者たちからパターン祭執行の比丘，長老
がたへ布施供養がなされる。功德を積ませ
ていただいた感謝の気持ちをこめて。

7. パターン誦唱祭の意義

この『パターン誦唱祭』は，サンガの伝道教化活動の一環であることは間違いないと思われる。ヤンゴンの都市化にともなって村の近くに工業団地が形成され，徐々に宅地も造成されつつあり，道路も新しく造られたり整備されてきている。荒れ果てた林野の中に崩れかかっていた古いパゴダや寺院もあったらしい。行政関係者も宗教省としても，こうした新開地に，住民の指導ができる僧侶がいてほしい。そうした要請が正式にヤンゴンの比丘サンガ長老会にもたらされ，サンビャー村にも熱心な信者の寄進協力があって僧院が新築されることになり，新しくウー・インダカ (U. Indaka) 長老が僧院長として派遣された，というのである。

同長老は，ヤンゴンのアノーヤタ通りパズンダウン区のミヤティンダン・サーティン・ダイから派遣され，ダンマチャリヤ (Dhammacariya Paḍi Paragu : 法阿闍梨) の資格があり，マハータツダマゾーティカダザ (Mahasadhmma Jotikadhaja) なる称号を授与されているお方 (1999年59歳) であった。

したがって，優れた資質，能力をもち社会的にも活力のある長老として新開地で手腕を発揮してもらうべく各方面から期待されているらしい。

都市化により複雑になり荒廃しがちな郊外の安寧と秩序の維持，青少年の啓蒙と社会の浄化，これは行政当局にとっては頭を悩ます問題にちがいない。こうした状況下で新仏教寺院の果たす役割は非常に大きい。

二度におよぶ「パターン祭」の挙行は，この郊外の村に何をもたらしたのだろうか。パターン誦唱の音声は，拡声器を通じて村の隅々まで届き，新僧院の存在をアピールしたに相違ない。新僧院を建造する物音は村の人々を活気づけたはずだ。新しく僧院施設への寄進者も名乗りをあげ，僧院へやってくる信者も増えてくる。

しかし，決していいことばかりではない。ヤンゴンから多くの人々がやってくる。村に色々な人が入りこんでくる。様々な心配や不安の種も同時に持ち込まれてきているはずだ。

パターン祭のみならず，いろいろな仏教行事が，この僧院で挙行されることであろう。ヤンゴンの都市化の中で，この近郊の村も変わっていく。人々の依り処として，この僧院が発展し，社会の浄化のために力を発揮してほしい。そう願いつつ，私は今後も折りをみて，この地に足を踏み入れたいと考えている。

あとがき

最初に触れたように，1998年3月7日，知人のビルマ人夫妻の家族や客人達と共にシュエナンダ・パヤヂータイで，その日の夕方まで，「パターン・ボエ」の行事を見学させていただいた。

たまたま当日，二人の日本人旅行者でミャンマーに何度か訪れたことのある老年の方々とも一緒になり話を交わしたが，今までこのようなミャンマーでの仏教行事を見たことはなく「大変興味深かった。仏教について考えさせられ，勉強になった」と興奮気味に喜んでいたので印象に残った。

ミャンマーにおける仏教信仰の生きている姿は，こうした実際の寺院における儀礼や行事に現れており，それに参加してみても初めて実感することが可能になるのであろう。

「諸行無常」のことは，こうした仏教行事をも変容させていく。はかな

い営みの一つであることには変わらない。ビルマの王朝時代、否、英国植民地時代の仏教サンガの行事さえ、その詳細は不明なことが多い。記録はあっても、当時の人が分かりきっていると考えていたことは抜け落ちてしまっている。

行われなくなってしまった行事も慣習も人々の記憶から消えていく。

時の流れの中の一里塚、たしかにその通りではあろう。つたない記録にすぎないことも分かりきっている。それであっても、私は仏教の中で生きようとした人々の一こまを伝えたい、と試みたのである。

謝 辞

私に「パターン祭」見学を勧めてくださり車の手配から長老僧への紹介、その他すべての案内をしてくださったキンタンヌエ Khin Than Nwe さん、およびご家族の皆さんには大変お世話になった。この稿はそのおかげで出来た記録であり、言葉を尽くせないほど有難く、幾重にもお礼申しあげたい。

その他いろいろご好意、ご助言をいただいたミャンマーおよび日本の方々、京都光華女子大学真宗文化研究所の方々に謝意を表する次第である。

参 考 文 献

ビルマ第六回仏典結集版 25～29巻【Patthana Vol. 1～5】

ビルマ第六回仏典結集版【Atthasalinr Atthakatha】 同 PTS 版

赤沼智善訳【ビガンデー氏緬甸仏伝】

R.R.P. Bigandet, "The Life or Legend of GAUDAMA; The Buddha of the Burmese" 初版1858年, 第2増補版1866年, そのリプリント1979年(インド)

生野善應著【ビルマ上座部仏教史】山喜房 1980年

U Jotalankara, "Dhammanandavatrwatcan" Dhammananda Vihara, USA, 1999

同 【南方上座部仏教のおしえ】世界平和バゴダ, 北九州市, 1985

水野弘元著作撰集第三巻【パーリ論書研究】(春秋社)

Mahadhammasankram 編 "Sasanāṅkāra catam:" 1956年刊本(ビルマ語)

同上書和訳: 池田正隆「サーサナーランカーラ・サーダナービルマの仏教史に関する伝承の記録一〔1〕～〔9〕」【仏教研究】9号, 10号, 11号, 13号, 16号, 18号, 22号, 27号, 30号(国際仏教徒協会, 1980～)

Shwetigon-cetidaw Gopaka 編 "Yangon-myo Shwetigon-cetidaw Mahapaṭṭhan" (ビルマ語)